



小さな生態系を守る

～身近な動植物から知る生物多様性～

街なかを見渡すと、公園やビルの植え込み、道路わきに植えられた樹木や花、いつの間にか芽を出して生い茂る草など、多くの植物を見ることができます。

草むらではヤマトシジミがカタバミの葉に卵を産み、生まれた幼虫がその葉を食べています。幼虫を目当てにシジュウカラもやってきます。この他にも植物と生きものには固有のつながりがあり、それぞれの生育場所で複雑に関わり、互いに支え合っています。それが、一つの小さな生態系です。そして、このような「多種多様な生きものたちの個性とそのつながり」のことを生物多様性といいます。

もし、カタバミがなくなってしまうとどうなるのでしょうか。ヤマトシジミが減り、シジュウカラなどの鳥が減り、鳥が運んでいた植物のタネも遠くへ運ばれなくなってしまいます。そうして生態系が崩れてしまうと、いずれ私たち人の暮らしにも影響を及ぼします。

地球にとって大切な生態系のバランスを守るため、2011年から2020年までを「国連生物多様性の10年」と定め、世界各地で生物多様性を保全する取組みがはじまっています。

豊島区のように、まとまった緑地や水辺が少ない都市では、私たち「人」が生きものの生育に適した空間を守り、時には増やしながら、この身近な生態系を見守っていくことが大切です。

小さな生きものたちのために、私たちにできることは何なのでしょう？

ヤマトシジミ

人家周辺で最もよく見られる小さなシジミチョウの一種。羽の表面はやや光沢のある水色で、裏面には灰色地に黒い斑紋が散りばめられています。道ばたなどによく見られるカタバミを選んで卵を産みます。孵化した幼虫がカタバミの葉を食べるからです。他にも、特定の植物を好む虫がいるために多様な植物の存在が必要です。

樹木

コナラやクスギなどの樹木にはドングリがなり、いろいろな生きものの餌になります。

シジュウカラ

シジュウカラは、スズメ位の大きさで、白い頬と胸のネクタイ模様が特徴。市街地の公園や庭などにも生息し、都心でも比較的に見かけることが多い鳥です。雑食で、果実、種子、昆虫などを食べています。

ミツバチ

植物の花から蜜を集める際に、植物の受粉を手伝う役割があります。いちごなどの農作物が実をつけるためにも欠かせない存在であり、ミツバチが適度に存在することにより、生態系のバランスが保たれ、人の暮らしも支えられています。日本には、トウヨウミツバチの仲間であるニホンミツバチと養蜂のために導入されたセイヨウミツバチがいます。

ショウリョウバッタ

都市部の公園や芝生、河川敷などにも適応し、日本のバッタ類の中でも比較的によく見られる種類です。しかし、空き地や草原の減少とともに現在では数が少なくなってきています。食性は植物食で、主にイネ科植物の葉を食べています。

